

グローバル時代における視覚芸術と言語芸術の融合に着目した言語文化の授業実践に関する研究 —伝統と現代を結び発展させる児童・生徒の育成を目指して—

高松美紀（東京学芸大学附属国際中等教育学校 教諭）

1. 研究目的と問題設定

本研究は、視覚芸術と言語芸術を融合させた言語文化に関する授業開発を行い、グローバル時代の新たな言語文化教育の可能性を提示し、教育実践に資することを目的とする。2019年度の研究では、高校生を対象に「写真俳句」を中心とした実践を行い、視覚芸術と言語芸術の融合による相互補完性や相乗効果などの発見や評価方法などの知見が得られた。ただし、これを初等教育段階で発展させるためには発達段階を考慮した具体的な実践と検証が必要である。また、視覚芸術と言語芸術の融合については、より直接的にイメージとことばとの交渉を取り上げて言語教育への応用を検討する可能性がある。日本の伝統的な言語文化は、「古典離れ」の傾向が指摘されるが、イメージと密接な関係をもって発展してきた特徴があり、現代美術に受け継がれている。さらに近年はグローバル化やIT技術の発達によって、イメージと融合した新たな言語表現のスタイルや造形美術が生まれている。2020年度の継続研究では、この視覚芸術と言語芸術の交渉・融合に着目してグローバルな視点と伝統的な言語文化の観点を取り入れ、新たな言語文化を創出する生徒の育成を試みた。

2. 研究方法

上記の研究目的を達成するため、研究方法として以下の三つの実践を柱とした。

第一に、写真俳句の小学校段階における実践と検証を行い、課題と可能性を検討した。対象は品川区立伊藤学園6年生であり、児童の学びの過程と共に実践協力者の直面した困難や試行錯誤、変化も記録し、分析・検討を行った。

第二に、「エクフラス」(ekphrasis: 視覚芸術の言語化) を応用した言語感覚や表現力の向上を検討した。エクフラスは古代ギリシア・ローマの修辞学に起源を持ち、西洋では主に詩と絵画の関係において議論されてきた。言語教育分野では、詩の創作における抵抗感の逡巡などの実践報告があるが、日本国内では言語教育におけるエクフラスの実践は十分な報告がない。都立国際高等学校の1、3年生を対象にエクフラスの応用による言語力育成の授業開発を試み、効果を検証した。身近な対象物から絵画の描写へと段階的に展開し、神話(『古事記』)を題材にした絵画の描写、詩の創作を行った。

第三に、和歌を中心に日本の伝統的な言語文化の発展としてイメージとの融合、現代化を試みた。マックミラン(2009)は、「日本の文学はきわめてエクフラス的である」ことを指摘し、高階(2007)も日本の文化的伝統として詩歌、特に和歌と絵画とが西洋に比べてはるかに深い関係を持つこと、その要因として文字の要素を論じている。そこで、都立狹江高校1年生(国語表現・古典)を対象に、和歌とイメージを融合させた現代的な創作活動を行った。東歌を含む校歌の探究を導入に年間を通して和歌の学習と創作を実施し、伝統的な言語文化と現代的な表現を融合させた独自の作品を創作した。

3. 結果と今後の課題

小学校における写真俳句の実践では、ビジュアルイメージを媒介とすることで、俳句創作に対する意欲の喚起、表現対象に対する丁寧な観察、協働スキルの向上が見られた。さらに推敲過程の言語化「ジャーナル」の応用は、児童の言語感覚の向上とともに、内的なことばの試行錯誤のプロセス「主体的に取り組む態度」の可視化と評価に有効であることが明らかになった。また、コロナ禍で限定された校内での活動が逆に「日常をアートで異化する」経験を児童にもたらした。

高校では「エクフラス」に着目し、「視覚芸術の描写」と「和歌とイメージの現代的な融合」に取り組んだ。

「視覚芸術の描写」では、エクフラスの性質である「眼前にありありと想起させるような描写」に着眼した。抽象と具象の均衡、古典の転移の検討から『古事記』と青木繁の作品を中心に創作し、最終作品はより創造的であった。生徒自身で視点の取り方や創造可能性について検討し、語彙や比喻、感覚表現などの彫琢を重ねて言語感覚と表現力に飛躍的な向上が見られた。絵画とテキストのエクフラスには、双方向の作用として多様なスタイルがあり、その検討が今後の課題である。

「和歌とイメージの現代的な融合」では、身近な「多摩川」を導入に古典の学習内容と関連させて和歌(短歌)を継続的に詠み、概念やテーマで現代の詩歌と比較する探究学習を行った。並行して和歌色紙や屏風絵、現代アートを紹介し、詩歌とイメージを融合させた作品を創作した。成果として伝統的な言語文化への理解、自己表現に対する抵抗感の逡巡、表記を含めた表現への意識の高まりが見られた。また、欧州や詩画の共通文化を持つ東アジアの生徒との作品交換等も行ったが、コロナ禍で制約が多く、グローバルに伝統的な言語文化と現代化を協働的に探究する活動は今後の課題である。

〈引用文献〉マックミラン・ピーター、佐々田雅子訳(2009)『英詩訳・百人一首 香り立つやまごころ』集英社、p30./ 高階秀爾(2007)「歌を描く、絵を歌う—日本における詩歌と絵画の交渉」, 京都造形芸術大学 比較芸術学研究センター 『Aube—比較芸術学』(2), 淡交社, pp. 31-48.